國學院大學学術情報リポジトリ

國學院大學図書館蔵『堀川夜討絵巻』の特徴について

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2024-07-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 松尾, 葦江, 伊藤, 悦子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002000632

＜場面①＞

＜場面②＞

＜場面③＞

＜場面④－１＞

＜場面④－２＞

＜場面⑤＞

＜場面⑥－１＞

＜場面⑥－２＞

＜場面⑦＞

＜場面⑧＞

＜場面⑨＞

＜『堀川夜討絵巻』の表紙と巻子の形態＞

國學院大學図書館蔵『堀川夜討絵巻』の特徴について

松尾葦江
伊藤悦子

一、はじめに

本資料は平成二十三年に購入されたものである。古書肆のつけた書名は「弁慶絵巻」であったが、見るところ、武蔵坊弁慶の一代記を描く絵巻とは異なり、『平家物語』や『義経記』、幸若舞曲などで人気のある挿話「堀川夜討」を描いた絵巻と思われた。詞章がないので、内容は絵を手がかりに判断していくことになる。本稿は、伊藤悦子が資料の絵を読み解き、軍記物語や『舞の本』の本文を参照しながら本資料の特色を考察したものであり、大学院の演習「軍記物語と絵画資料」の時間に口頭発表した内容を基にしている。本誌の規定上、指導教授松尾との連名で掲載されることになったが、本稿のもととなった作業とその結果は、すべて伊藤悦子のものであり、松尾は論文として手づつな字句を直しただけである。

平成二十二年度から四年間、松尾を研究代表として【「文化現象としての源平盛衰記」研究―文芸・絵画・言語・

歴史を総合してー】（課題番号22320051）と題する共同研究が行われているが、その中で分かってきたことのひとつに、中世から近世の享受者にとって、軍記物語と芸能、各地の伝承などは決して別個のものではなく、例えば義経の物語や源平合戦の物語といっても『平家物語』や『義経記』に限らず、能・幸若・浄瑠璃、ときには歌舞伎をも含めて認知されていたらしい事実がある。本資料もその証例と見ることができよう。今後は単なる出典研究ではなく、文学と芸能が互いにふれあい、交差して新しい文芸を生み出していったこと、それらが一体となって私たちの心のふるさとともいうべき「物語」を形成してきたことを前提に研究が進んでいくものと思われる。本稿もさような方向をめざして書かれている。

なお本資料は平成二十四年度「学びへの誘い―物語にみる源平合戦」に展示されたが、金砂子地がやや暗い展示ケース内で美しく映え、周囲の資料を引き立てる効果ももたらしていた。今よりも照明の暗かった時代の享受者たちに対して、当時の絵巻・絵本はさまざまな工夫を凝らして人目を惹きつけ、想像力をかき立てようとしていたのかもしれない。それら絵師の技巧や工房内の作業分担の問題も含めて、絵画資料と文学との関係の研究は、これからの分野である。

二、「堀川夜討」を題材とした絵画資料

幸若舞曲『堀川夜討』は、源頼朝・義経兄弟が不仲となり、頼朝は、土佐坊正尊を上洛させて義経暗殺を図るが失敗し、土佐坊が斬首されるまでのストーリーである。兄弟の確執→土佐坊上洛→義経暗殺失敗→土佐坊の死という流れは、『平家物語』諸本や『義経記』にも記されており、六条堀川の宿所を土佐坊に襲撃された義経は、この後、都

落ちして各地を流離（さすら）うことになる。この幸若舞曲は、一連の義経都落ちの序章ともいえる、土佐坊の堀川夜討事件を題材に取り上げたものである。

堀川夜討を題材にした現存する絵画資料は、管見の限り、さほど多くはないようである。いくつか例を挙げると次のようなものがある。

A．美濃部重克氏蔵『堀川夜討絵巻屏風』
B．神奈川県立歴史博物館蔵『堀川夜討絵巻』狩野洞雲益信筆
C．東京国立博物館蔵『堀川夜討絵詞絵巻』住吉如慶筆
D．志度寺蔵『堀河夜討図絵』（絵巻）
E．川越市・養寿院『堀川夜討屏風』住吉具慶筆
F．中尊寺蔵『義経北国落絵巻』[1]
G．ニューヨーク公立図書館スペンサー・コレクション『堀河夜討絵巻』[2]

この他、奈良絵本（大英図書館蔵『堀川夜討』[3]）、絵入版本（『舞の本』「堀川夜討」、『義経記』）の挿絵などが挙げられるが、絵巻物は極めて少ない。絵巻物でも、Fのように、『義経記』の記述がもとになっていると思われる北国落ちが中心となり、「堀川夜討」は場面の一部としてしか描かれていないものや、Gのように、「堀河夜討」と題してあっても、内容は『平家物語』巻十二「土佐房被斬」が題材になっているものもある。

D、Eは未見であるが、Eについては、川越城主酒井重忠が毎夜聞こえる矢叫（やたけび）や蹄の音に悩まされたことが発端となり、城の秘庫から発見されたといういわく付きの屏風で、半双を養寿院に寄進することで怪現象が収まった[4]という、河越城の七不思議の一つに数えられている興味深いものである。

A～Cは幸若舞曲をもとにして作成されたと思われる絵巻であるが、幸若舞曲をベースにしながらも、中には、部分的に『義経記』の内容を取り入れている作品もあるようである。この点に関しては、國學院大學図書館所蔵『堀川夜討絵巻』（以下、國學院本と記す）にも同様の傾向が見られる。そこで、これらの絵画資料も適宜参照しながら、『舞の本』[5]「堀川夜討」（以下『舞の本』と記す）、東洋文庫蔵丹緑絵入十二行木活字本『義経記』[6]の本文・挿絵と比較し、國學院本はどのような資料を参考にして描いているのか、また、それらをどのように生かして作品を構成しているのか、などを考察し、國學院本の特徴を明らかにしたい。

三、書誌について

國學院本は、一軸の巻子本（完本）で、内題・外題は無い（金銀箔散らしの題簽が貼られているが、文字は記されていない）。紙高は28・7㎝、横幅は約590㎝。表紙には金波に色とりどり（銀・紫・緑・茶色）の片輪車の文様があり、見返しは金砂子散らしである。料紙は斐紙。本文は無く、絵のみで構成されている。奥書などの文字情報は無く、成立年代は不明であるが、人物描写などから、近世初期から中期のものと推測される。料紙には全体的に金砂子が散らしてあり、すやり霞とは趣が異なる。絵は、やや稚拙な感はあるものの、注意深く見ると、細部まで詳細に描写しようとしている場合が多いことに気付く。たとえば、人物の顔は、髪や眉毛も一本一本丁寧に描かれ、僧の場合は頭や髭の剃り跡まで描写している。装束も、衣服や鎧兜はもとより、雑兵の脚絆の模様までもが細かく描かれる。馬の目には長い睫毛があり、鼻や口の周りからも長い毛が伸びている。たてがみを幾つかに分けて束ねた、いわゆる巻髪の馬（大名行列の引馬などに見られる）が描かれているのも珍しい。植物も丁寧に描かれている。建物は、屋根

瓦や木戸の木目などはリアルだが、その反面、縁側や壁、室内などの描写は、かなり大ざっぱで簡略であるなど、描き方の疎密に極端な差があるように思われる。

絵は連続して描かれているが、以下に記す九場面に分割することが出来る。各場面は、松などの樹木や建物で区切られており、最後の二場面（⑧と⑨）の間のみは、空間を広く取ることで場面を分けている。

①宿所で伊勢三郎（『義経記』では江田源三）をもてなす土佐坊。
②土佐坊を強引に連れ出す弁慶。
③義経の面前で起請文を書く土佐房。
④六条堀川の義経の館へ押し寄せる土佐坊と、応戦する構えの義経主従。
⑤義経主従および静と、土佐坊勢の戦闘。
⑥弁慶・伊勢三郎の活躍。
⑦逃亡する土佐坊。
⑧捕縛されて義経の前に引き出される土佐坊。
⑨土佐坊の斬首。

幸若舞曲では、梶原景時の策略により、頼朝は義経暗殺役に土佐坊を選ぶ。景時は、頼朝の御判を持って土佐坊の館へ行き、頼朝の意を伝える。土佐坊は不満に思いつつも承諾し、上洛して先ずは六条堀川の義経宿所の様子を偵察するという記述がある。いっぽう伊勢三郎は、鎌倉から土佐坊の宿所へ馬を届ける者達と出会い、義経に報告する。そこで、義経から土佐坊を連行するよう命じられて、土佐坊の宿所に行くのであるが、國學院本には、ここまでの経緯が描かれておらず、幸若舞曲よりも物語の範囲が狭められている。

四、各場面の特徴

次に、國學院本の各場面ごとの特徴を、『舞の本』・『義経記』の本文や挿絵と照らし合わせ、必要に応じて他の絵画資料も参照しながら確認していく。

〈場面①〉

土佐坊の宿所で、土佐坊と対面している伊勢三郎の前には鎧が置かれ、庭には一疋の馬が引かれている。酒宴の最中らしく、土佐坊は盃を持ち、伊勢三郎の正面には接待役の童一人がいる。

『舞の本』には、仮病を装った正尊が、「大白衣（びやくえ）に白檀（びやくだん）し、綿帽子にて額を包み、童（わつぱ）二人に手を引かれ」（「白檀し」とは白檀の香料を振りかけること）て現れたとあり、挿絵にも二人の童が描かれている。美濃部氏蔵『堀川夜討絵巻屏風』[7]（以下、美濃部氏本と記す）にも、二人の童（女性にも見える）が描かれているが、神奈川県立歴史博物館蔵『堀川夜討絵巻』[8]（以下、神奈川歴博本と記す）には、童は描かれていない。東京国立博物館蔵『堀川夜討絵詞絵巻』[9]（以下、東博本と記す）は、國學院本と同じく童一人が描かれているが（絵巻の本文には「童一人」とある）、構図がかなり異なり、酒宴も行われていない。『舞の本』では、土佐坊が伊勢三郎のために酒宴を開き、引き出物として鞍具足や馬を用意したことが記されており、童の人数を除けば、國學院本の構図と概ね一致している。

細かい点に注目すると、國學院本では、土佐坊は脇息に寄りかかっているのだが、『舞の本』にはそのような記述は無い。挿絵にも脇息は描かれておらず、この点は美濃部氏本・神奈川歴博本・東博本いずれも同様である。そこで、『義経記』を確認すると、この場面の挿絵は無いが、本文には「土佐坊脇息にかゝりてぞ居ける」（傍線は稿者による）

とあり、國學院本は『舞の本』を参考にしながらも、部分的に『義経記』の記述を取り入れて描いているらしいことが分かる。

〈場面②〉

胴丸を着けた弁慶が、嫌がる土佐坊を自分の馬（黒馬）に同乗させて走っている。後を追う土佐坊の従者達と、それを留めようとしている弁慶の従者が一人、宿所内には土佐坊を心配そうに見つめる童の姿がある。

場面①と比較すると、土佐坊も童も装束が異なり、同日に起こった出来事として描かれているのかどうか疑問である。『舞の本』には挿絵は無いが、土佐坊に騙された伊勢三郎が、義経に勘当された「其後」、弁慶は「胴丸取つてうち懸け」、「黒き馬」と「童一人」を具して土佐坊の宿所へ向かったとあり、日時を明確にしていない。『義経記』では、江田源三を勘当した義経が、宿所に戻った弁慶に対し、「只今かゝる不思議こそあれ」と語って、弁慶を土佐坊の宿所に向かわせるので、同日に起こった出来事となる。おそらく國學院本は、『舞の本』の記述を参照し、「其後」を後日の出来事と解釈して描いているのだろう。だが、弁慶の胴丸と黒馬は『舞の本』の記述通りだが、従者は童でも童形でもないので、『舞の本』の記述とは異なる。『義経記』には、「雑色一人ばかり召し具して」とあり、この点においては『義経記』の記述を採用したと考えられる。ちなみに『義経記』の挿絵には、「童」というよりは、江戸中期頃の若衆のような髪型の鎧武者が描かれており、弁慶が乗る馬は黒馬ではない。

〈場面③〉

室内に着座している義経の前で、土佐坊は庭に円座を敷いて座り、筆と紙を手に持って起請文を書いている。縁側では、弁慶が土佐坊を睨み付けながら座っている。義経の左脇には、常陸房海尊と思われる僧の外、八人の武士が詰め合うように着座している。

美濃部氏本や神奈川歴博本では、土佐坊は庭に座っているが円座は無く、弁慶も土佐坊のすぐ脇で監視している。東博本では、土佐坊は館に上がり、縁側で円座に座って起請文を書き、義経の脇には静と思われる人物がいる。『舞の本』の挿絵では、義経、弁慶、土佐坊の三人のみが描かれ、三人とも館内の一室にいる。土佐坊は筆も紙も手に持っておらず、起請文は土佐坊の目の前に開いて置かれた状態である。円座も無い。同じ場面であるが、作品によって絵の構図、特に土佐坊の居場所などが、かなり異なっている。

『舞の本』の本文では、土佐坊は「中門まで召され、讃岐円座を投げ出す」とあり、國學院本の絵と一致している。円座も讃岐円座であろう。『舞の本』の中では本文と挿絵が矛盾していることになるが、この直後、義経も弁慶も土佐坊の言葉巧みな弁明を信用してしまうのであり、あらためて館内に上げて起請文を書かせたと捉えられなくもない。東博本はまさにこのケースであろうか。『義経記』には、「判官南向の廣廂（ひろひさし）に出で向ひ給ひて、土佐を近く召して、事の仔細を尋ねらる」とあり、土佐坊が具体的にどの場所にいたのかは記されていない。作品によって構図が異なるのは、『舞の本』も『義経記』も記述が少い上、『舞の本』の本文と挿絵が不一致であることも、理由の一つなのであろう。

〈場面④〉

堀川宿所の門の前に押し寄せる土佐坊とその軍勢。騎馬兵は少なく、徒兵が多いためか、武器は太刀と長刀が中心である。数人が松明を持っていることから、夜討であることが分かる。門の内側には、胴丸を着けた身分の低そうな武士が一人、弓を取って門の方を睨み、足元には火が焚かれている。宿所内では、鎧を着け、帯を結んでいる義経に、兜を手渡そうとしている静の姿が描かれている。

神奈川歴博本は、宿所内には義経と静の姿しかない。東博本は、門の屋根の下に二人の武士と一疋の馬がおり、義

経が着替え終わるのを待っている様子である。義経は鎧兜をつけて門の方を伺い、静は弓を手渡そうとしている。弓を手渡すのは神奈川歴博本も同じである。『舞の本』や美濃部氏本では、静が義経の武装を手伝う場面の絵は無いが、『舞の本』の本文には、静は義経の武装を手伝い、弓の調整を行ってから義経に弓を手渡した後、自らも武装したとある。弓を手渡す構図はこの記述からであろう。その直前の記述に、静は「（義経が）帯取り締むる其隙に、兜を取て参らする」とあり、國學院本の絵は、まさしくこの一文に忠実に従っているのである。『舞の本』には、この二人の他は登場しない。いっぽう『義経記』には、「下部に喜三太ばかりなり」とあり、喜三太が弓を射る技は、「養由を欺く程の上手なり」としているので、國學院本で弓を取る人物は喜三太であり、明らかに『義経記』の記述を踏まえている。ところが、『義経記』の本文には静が参戦したという記述が無いにも関わらず、挿絵では喜三太ではなく静が長刀で戦っている。製作者の勘違いとも考えられなくはないが、むしろ、この丹緑本『義経記』が刊行されていた時代には、義経と共に戦うのは静であるというイメージが既に定着していたのではないだろうか。[10] 同様のケースは他にもある。同じ『舞の本』では、「夜討曽我」[11]の挿絵が例としてあげられる。『曽我物語』巻八「富士野の狩場への事」には、御狩の最中に、新田四郎忠綱が猪に後ろ向きで飛び乗るというエピソードが記されている。[12] ところが、『夜討曽我』の本文には、このエピソードが記されていないにも関わらず、後ろ向きで猪の背中に乗っている新田四郎忠綱が挿絵に描かれているのである。[13] この場合も、本文の内容とは異なっているにもかかわらず、当時は誰もが知っているような有名な場面を、挿絵として掲載していたと考えられ、必ずしも本文と挿絵の内容が一致していなければならないという認識はなかったようである。おそらく読者にも、あまり違和感は無かったのだろう。

同じ様に、喜三太らしき人物が描かれているのは、美濃部氏本である。義経・静が奮戦する中、白壁を挟んで、兜をかぶらずに長刀で戦う人物が描かれているのである。美濃部氏は「この場面は幸若舞曲『堀川夜討』に『義経記』

を取り合わせたもののように思われる」と述べられている。全体的な構図は、必ずしも國學院本に近似するとは言いがたいが、共に『義経記』の影響が見受けられ、その点に関しては、両作品共通の特徴であるといえよう。

〈場面⑤〉

義経と喜三太は刀、静は柄の長い大長刀で土佐坊の軍勢と戦う。静は緑色の上衣に赤い袴、白い鉢巻をつけている。倒れた敵の背中を斬りつけ、血しぶきが飛び散っている。

美濃部氏本・神奈川歴博本・東博本いずれも静は戦っている。『舞の本』の本文には、静の戦闘そのものに対する具体的な記述は無いが、義経の制止を耳にも入れず、真っ先に飛び出し、「進む姿を御覧ずれば、萌黄匂の腹巻を、衣の下にぞ着たりける。義経の秘蔵の白柄の長刀、弓手の脇に掻ひ込ふで、丈成髪（たけなるかみ）をばつと乱れば、黒母衣（ほろ）やらんと、見えたりけり」と、静の華麗な姿を詳細に記している。いっぽう喜三太の場合は、『義経記』によると、弓を捨てて「大長刀」で斬り合ったとしている。本来は喜三太の役割であった戦闘場面での活躍が、いつの間にか静に置き換わり、それが流布してしまうのであるが、喜三太の武器が「大長刀」であることも、二人の入れ替わりに違和感を感じさせない要因の一つであったのだろう。國學院本では、静に役を奪われてしまった喜三太は、代わりに太刀を持つことによって、新たな役割を担っている。

〈場面⑥〉

馬上から指揮をとる土佐坊だが、兵士達は劣勢ぎみである。弁慶は黒い棍棒で敵の頭部を激しく打ちつけている。棍棒の黒い部分には沢山の疣があり、先端には白い刃が付いている。弁慶の背後には、縁側で弓を持った義経が椅子に腰掛け、静はその脇で、長刀を持ったまま庭に座って控えている。伊勢三郎は、義経の前に跪き、敵の首二つを刺した刀を掲げている。

伊勢三郎は庭に跪いているが、『舞の本』では「落縁にづんと上がつて、二つの首を指し上げ、義経にこれを見せ申す」とあり、挿絵には伊勢三郎が縁側に上がり、二つの首を縁の床板に並べて置いている（『義経記』では江田源三が二つの首を取るが、彼自身討死してしまうため、該当場面は無い）。そのため、美濃部氏本・東博本・神奈川歴博本は、伊勢三郎が縁側に上がるか庭にいるかの違いはあるものの、二つの首は縁の上に並べられており、刀に貫いて掲げるのは國學院本独自の描写である。しかしながら、『舞の本』の本文には、「二つの首を指し上げ」とあり、決して「並べた」とは書いていないのである。つまりこれは、國學院本が『舞の本』の挿絵や他の絵画資料を参考にせず、『舞の本』の本文を具体化しようとした結果、「二つの首を」刀に刺して「指し上げ」るという描写になったと考えてよいのではないだろうか。なお、義経が椅子に腰掛けるという描写も他の資料には見られない。『舞の本』の本文にも記述は無く、國學院本独自の構想と思われる。

弁慶の棍棒については、『舞の本』に詳細な説明がある。「武蔵が棒と申は、嵐激しき高山の岩間より生え出たる白黄楊を、八尺五寸につゝ切て、中を厚く端を平く、東海渡る船櫓なりに拵へ、宍粟鉄を延べ付け、刃棟をやつて刃を付け、八尺五寸のその内に、八十三の疣を据ゑ、釘の頭を磨き立、狭間を黒く塗つたれば、疣は輝く、地は黒し、刃は白し」とあり、おおよそ記述通りの絵になっている。この後、弁慶が姉歯平次光景と戦う様子が記される。「拝み打ちにちやうど討つ。兜の絡繰り、はらりと砕け、落花のごとく散りければ、首の骨が討ち込まれて、胴へくつとぞにへ入たる」とあり、弁慶に打たれている敵が姉歯平次であることが分かる。國學院本の描写では、首が胴へ「くつと」入っているのかどうか分かり難いが、東博本では、完全に首が胴に埋没してしまっている。ただし、東博本は黒い棍棒ではなく、木の長槍のような武器である。黒い棍棒は、『舞の本』や『義経記』の挿絵に描かれており、この他、大英図書館蔵奈良絵本『堀川夜討』などにも出ている。

黒い棍棒の原型となる武器は、南北朝期頃には存在していたようである。『図録　日本の合戦武具事典』[14]によると、打撃力を強化するために、太い樫の木などを用いて八角にしたもので、鉄の延板に鉄鋲を繁く打った金棒（金砕棒・金材棒）もあったという。『太平記』巻八「四月三日合戦ノ事付妻鹿孫三郎勇力ノ事」に「八尺餘ノカナサイ棒ノ八角ナルヲ」[15]、『曽我物語』巻八「富士野の狩場への事」に「鐵の棒の、三人して持ちけるを」[16]、この他、『北条五代記』、『室町殿物語』などにも記され、ポピュラーな打撃用武器だったらしい。戦国時代を描いた屏風絵では、齊藤茂美氏蔵『長谷堂合戦図屏風』（伝・戸部一憨斎正直筆）にあり、最上義光や延沢満延が黒い鉄棒で戦っている。

〈場面⑦〉

棍棒で激しく攻めたてる弁慶に、土佐坊は長刀を構えながらも背中を見せ、逃げ腰である。描き忘れであろうか、棍棒の先には刃が付いていない。弁慶の周りには四人の武士がいるが、いずれも伊勢三郎や喜三太ではない。

『舞の本』では、河原を指して逃げる土佐坊を、弁慶と伊勢三郎が絡め捕ったとし、『義経記』では、土佐坊は賀茂川を上って鞍馬へ逃げ込むが、鞍馬法師に追い立てられて僧正が谷へ逃げたところを弁慶らに捕縛される。東博本では川を渡って逃げる土佐坊勢が描かれており、『舞の本』の記述に近いが、國學院本では川は無く、木々や岩が描かれていることから、『義経記』の僧正が谷を意識していると考えられる。

〈場面⑧〉

室内で、兜を脱いで座っている義経と、縁側で義経の兜を持って控える武士。義経の正面の庭には捕縛された土佐坊が座り、左側には弁慶、右側には常陸坊等の家来達が控えているが、伊勢三郎や喜三太らしき人物は見当たらない。

『舞の本』には、この場面の挿絵は無く、土佐坊の潔い態度に義経が感嘆することが記されているだけで、具体的な状況が分からない。『義経記』でも、義経は土佐坊を、「大庭に据ゑさせ、縁に出」たとあるだけで、それ以上の記

述は無い。挿絵では、縁に座る義経の脇に控える武士達の中に弁慶がおり、御簾の陰から静が顔を出している。だが、國學院本では義経は縁まで出ていないし、静も描かれていない。『舞の本』に情報が無い場合でも、必ずしも『義経記』で補おうとする意識があるわけではないようである。

〈場面⑨〉

捕縛されたまま、虎皮の円座に座る土佐坊。後ろには尻綱を握る武士と、太刀を振り上げて、首を斬ろうとしている武士がいる。土佐坊の正面と左側では、旅人や町人達が、いかにも興味深げな表情で処刑の様子を見物している。右側には、三人の武士達が、それぞれ長刀・刺又・突棒を持って座っている。

この場面も、『舞の本』では「六条河原で切にけり」、とあるのみで、続いて「かの正尊を見し人、貴賤上下をしなべ、感ぜぬ人はなかりけり」という、土佐坊賞賛の一文を記して物語が完結する。『義経記』には、「喜三太に尻綱（しんづな）取らせて、六条河原に引き出だし、駿河次郎が斬手にて斬らせけり」とあり、具体的に二人の人名があげられている。だが、國學院本で尻綱を取っている人物は喜三太ではないようである。夜討の場面の喜三太は顎髭が生え、大きくするどい目つきであり、顎髭の無いこの人物とは異なっている。

処刑の場所は、『義経記』でも六条河原である。そのため、美濃部氏本や神奈川歴博本には、川が描かれている（東博本はこの場面が無い）。ところが、國學院本には川はおろか、背景が何も描かれておらず、草木や岩石の一つすら描かれていないのである。単に簡略化しているだけなのか、他の意図があるのかは、今後も検討していく必要がある。

右側の武士達が持っている刺又・突棒は、安土桃山時代頃から用いられたもので[17]、特に江戸時代には捕物用の捕獲具として、これらに袖搦（そでがらみ）を合わせて「三道具」と呼ばれて利用されていた。武士達も、頭を月代にして鉢巻を巻いており、まるで近世の町奉行所の役人のようである。

五、まとめ

以上のことから、まず、國學院本は、『舞の本』の本文を参考にしながらも、部分的に『義経記』の記述が反映されているといえる。だが、どちらの挿絵とも異なる点が多いことからみて、参照した資料には挿絵が入っていなかった可能性が高い（つまり絵入版本ではない）。しかも、他の絵画資料が共通して描く構図にも一致しない点が多く、はたして粉本とした絵画資料があったのかさえ疑問に思うほどである。

人物描写や武具などには、江戸時代を思わせる描写が目立ち、近世に描かれた作品であることは間違いないだろう。『舞の本』の記述と完全に一致する描写もあれば、伊勢三郎が首二つを刀に刺して掲げる場面など、他の絵画資料にも見られない独創的な描写がある。参考にした絵画資料があったかどうかは不明であるが、少なくとも、今回参照した絵画資料には、國學院本と明らかに一致すると思える構図は無かった。現段階では、國學院本は、幸若舞曲の記述をもとにしながら、記述が不足がちな細かい部分は『義経記』で補ったり、あるいは独自の解釈を加えることで、構図を具体化していったと考えてよいだろう。但し、今回確認できた資料が少ないため、それらが、國學院本の独自描写であると断定することは出来ない。今後も未見の資料の調査を進めていき、更に國學院本の特徴を明らかにしていきたい。

注

（1）ＮＨＫプロモーション編「義経展　源氏・平氏・奥州藤原氏の至宝」（ＮＨＫ、平成十七年）による。

（2）Matthew Thompson「『堀河夜討』―解説と翻刻」（『立教大学日本学研究所年報』7、平成二十年八月）

（3）慶應義塾大学「世界のデジタル奈良絵本」データベース〈http://dbs.humi.keio.ac.jp/naraehon/〉（平成二十五年二月五日アクセス）による。
（4）岸伝平『川越夜話』（『川越叢書』第6巻所収、国書刊行会、昭和五十七年）
（5）麻原美子・北原保雄校注『舞の本　新日本古典文学大系59』（岩波書店、平成六年）
（6）岡見正雄校注『義経記　日本古典文學大系37』（岩波書店、昭和三十四年）
（7）美濃部重克・美濃部智子『酒呑童子絵を読む　まつろわぬものの時空』（三弥井書店、平成二十一年）
（8）美濃部前掲書によった。
（9）東京国立博物館情報アーカイブ〈http://webarchives.tnm.jp/imgsearch/show/C0066517〉（平成二十四年十一月十六日アクセス）による。
（10）小林健二「静も諸共に切り払ひ切り払ふ―能《正尊》と幸若舞曲「堀川夜討」の静御前」（『国文学　解釈と鑑賞』75―12、平成二十二年十二月）
（11）注（5）と同じ。
（12）市古貞次・大島建彦校注『曽我物語　日本古典文學大系88』（岩波書店、昭和四十一年）
（13）黒石陽子先生に御教示いただいた。
（14）笹間良彦『図録　日本の合戦武具事典』（柏書房、平成十一年）
（15）後藤丹治・釜田喜三郎校注『太平記一　日本古典文學大系34』（岩波書店、昭和三十五年）
（16）注（12）と同じ。
（17）注（14）と同じ。
※引用本文のルビは適宜改めた。